

関敬吾著『日本の昔話—比較研究序説』を読む

小沢俊夫

本書は著者にとって、おそらく「日本昔話集成・全六卷」に次ぐ労作であろうし、日本における昔話研究に及ぼす影響という点では、「昔話集成」に劣らないであろう。

著者の永い闘病生活を知っている評者にとって、著者が退院後つぎつぎと論文を発表されたことは大きな驚きであり、喜びであったが、本書を見て、その不死身のようなカムバックに、驚きと喜びは大きくなるばかりである。入院中すでに著者は、アーネスト・トムソンを全部読み通してみて、日本との対応を調べていると洩らしておられた。入院生活というものは時間があり余るほどありながら、何もまとまつたことはできないものなのに、このように広範囲に目を通し、日本の昔話との対応をいろいろな角度からメモしておられたということは、まったく驚嘆に値する。その強靭な精神力は、後輩研究者を叱咤激励するものである。

本書の価値はもちろんその驚嘆すべき成績のみにあるのではない。「比較研究序説」という副題が示すように、柳田国男によっていた方向とは異なる研究でありながら、本書にこの賞を与えた選定委員会にも拍手をしており、またその方向も柳田のめざし

を拓いてくれた点にこそ、その価値があるのである。柳田も、やがては日本昔話を近隣諸民族の昔話と比較して研究することが必要であるということを、いくつかの箇所で暗示しているが、世界各国および日本での昔話研究の流れは、今や日本昔話を比較研究のなかにさらすことを不可避的に求めている。

そうした時期に「日本昔話集成」の著者が、「比較研究」への序説を発表したことの意義は、まことに大きい。そこには柳田の説および自己の「昔話集成」への批判が卒直に表明されており、一方では新しい研究課題の提起がたびたびおこなわれているのである。この老大家の学問に対する忠実な姿勢と、新しい問題を見つける意欲に、評者は心からの敬意を表する。

本書には「柳田国男賞」が与えられた。それは、まさにふさわしい授賞であつたと評者は考える。いくつかの点で柳田の批判をしており、またその方向も柳田のめざし

を送りたい。このことによつて、日本の昔話研究者の間に、学問的には互いに卒直に批判しあいながら、互いの価値を認めあう雰囲気がひろがるものと期待できるからである。それは、卒直な意見の交流をめざす「日本口承文藝學會」の発足にあたつてふさわしいできごとである。

全体は、ヨーロッパにおける研究史を著者の問題意識によって紹介する序章と、I 替話とその周辺、II 替話分類の諸形式、III 日本IIアジア地域の昔話の平行関係から成り、巻末にはIVに基づく「オリエント・アジア・日本の昔話比較対照表」がある。著者としてもつとも力点をおいているのはII・IIIと巻末の「比較対照表」であろう。また「比較研究序説」である本書にとってもつとも重要なところもここであり、今後の日本昔話研究にとって影響の大きいと思われるのもこの部分である。IIは分類形式の紹介という形をとっているがIIIにみられる具体的な比較の成果があちこちに顔を出しており、その意味で重要である。Iは控えめな題名をつけているが、昔話学概論とでもいうべきものである。

順を追つてみていくが、本書は全体として難解な本である。それはもちろん問題の

むずかしさからもくるのだが、そのうえに誤植が多いことと、文脈がつかみにくいこと、いろいろな略号が使われていることにも原因がある。本書は今後日本の昔話研究にとって重要なスタンダードワークとなるであろうから、誤植はぜひ著者と出版社において修正していただきたい。

アールネリトムソンのタイプインデックスの番号（いわゆるAT番号）と、トムソンのモティーフ索引の番号（通常MT. 又はMot.）のあとに大文字のアルファベットとアラビア数字で示す。本書ではMT.は省略されている)については、明らかに誤植とわかるばあいと、わからぬばあいがある。それは、ATの何番にこれをあてるかということがまさに問題なのであって、そこに著者の判断がはたらいているわかるから、判断のちがいかもしれないからである。従つてこの点については特に厳密な校正をお願いしたい。

原典からみて明らかに誤植と思われるものについては評者の判断を示すことにする。アールネリトムソンのタイプインデックスの各番号の記述の訳文についても同様で、評者から見て明らかに誤植あるいは誤訳と思われるものについては、評者として

の修正文を提示する。若輩の評者がこのようないくつも修正案を提示することはおこがましいことではあるが、本書は今後日本の昔話研究者にとって、いわば共有の財産となるべきものと信じてるので、われわれ読者の方からも気づいた点を示して、より完全なおいて修正していただきたい。

うな修正案を提示することはおこがましいことではあるが、本書は今後日本の昔話研究者にとって、いわば共有の財産となるべきものと信じてるので、われわれ読者の方からも気づいた点を示して、より完全な共有財産とすべきであらうと考えるからである。日本の全話型について、これ程広範囲な対象と比較することは、著者が序に言われたとおり、「個人の力をはるかに越えるものである。」しかも一度でできるものでもない。今後長く、多くの協力のなかでさまざまな試みをしつつ、より完全なものにされていくべきものと考えるからである。

この章でわれわれの比較研究にとって重要なのはファン・シイドウの言うオイコタイプ（24頁ではオイコタイプ、²⁰⁸頁と229頁ではオイコターピーと書かれているが、テュープというドイツ語は使わずオイコタイプという英語で貫した方がわかりやすからう）という概念である。それは「地理的ならびに文化的な地域に限定された、ある一定の地域に属する地域的変化型」である。ただし個々の話型について考えるばあいに、それが日本のオイコタイプといえるのか、アジアのオイコタイプといえるのか、という問題は簡単ではない。

クローンの方法論の中に、理論的にはオイコタイプにつながつていく問題かとりあげられている（13頁）。オリジナルなモティーフが決定されながら昔話の基本形式が

組み立てられるということに関して、「選択されたモティーフが首尾一貫した昔話にならない場合もあるかも知れない」といふ、実際上重要で困難な問題をとりあげてゐるのだが、その先の記述が難解である。著者が具体的にどのような手続きを求めているかがつかないので、何かの機会にわかりやすく書き直していただけたとありがたいと思う。

この章にはいくつも難解な文がある。

「昔話にはタイプを与えてその分布の全体にわたつて普通の資料を蒐集するのは、その基礎モティーフによるものである」(24、25頁)。「なぜなら、一般に初期の時代からの遺産としての昔話のすべてのものに影響を及ぼし、なんらかの法則に支配されいてるに相違ないからである」(25頁)。いずれも主語が抜けているために難解なのが、どこかに誤植がひそんでいるのか。

研究史をふりかえたこの章では、二十世紀前半でのヨーロッパにおける昔話研究にとつて重大な収穫であるウラジーミル・プロップの構造論的研究と、マックス・リュテイの様式論的研究がほとんど紹介されずに終つてゐる。このあたりは後進の学徒にまかせるという意味でもあろうか。

I 昔話とその周辺

この章は上述の如くいわば昔話学概論であり、これほど全般にわたつて体系的に述べた書は他にない貴重なものである。また、柳田以後の研究界に対しても「わが国の昔話、伝説の理論的研究も実証的研究もほとんど前述の柳田理論の繼承であつて、それ以後ほとんど発展していない。……日本でも昔話集の刊行は盛んであるが、これと並行してどの程度科学的研究を行なわれているだろうか」(76頁)と、先達としてきびしい言葉を述べている。われわれ後進の学徒はこの言葉に反論できるようにならなくてはならない。

後輩学徒への言葉は他にもみられる。

「過去にどこかに末女優先結婚の慣習があつたかどうか。これらがはたして相続慣習の反映であるか、もしくは重点後置の叙事の法則によるものか、研究の必要がある」(81頁)社会的慣習の反映とみると、文芸としての性質からくるものか、といふべきわざい問題についての積極的とりくみを呼びかけているのである。老大家がこうした新しい問題の提起をするその意欲は、まったく敬服に値する。

柳田が「完形昔話は主人公の生い立ちをもつて始り、あらゆる願望の充足、あらゆる障害の解除に帰着するものである。さらに主人公の伝記、もしくはある一族の鼻祖の由緒を解く（説くの誤りなら）かと思われる形を具えていると述べてある」に対しても著者は「昔話では鼻祖の問題は一つも語ってはいない。ほとんど潜在的である。これを顕在的に述べたものは、事件の過程は共通していても、それは昔話ではなく、むしろ英雄伝説であり、始祖伝説であろう」と述べている。柳田はその潜在的なものを汲みとつて完形昔話という概念をたてたのであるから、著者のこの考え方は批判ではな

くいわば昔話学概論であり、これほど全般にわたつて体系的に述べた書は他にない貴重なものである。また、柳田以後の研究界に対しても「わが国の昔話、伝説の理論的研究も実証的研究もほとんど前述の柳田理論の繼承であつて、それ以後ほとんど発展していない。……日本でも昔話集の刊行は盛んであるが、これと並行してどの程度科学的研究を行なわれているだろうか」(76頁)と、先達としてきびしい言葉を述べている。われわれ後進の学徒はこの言葉に反論できるようにならなくてはならない。

後輩学徒への言葉は他にもみられる。

「過去にどこかに末女優先結婚の慣習があつたかどうか。これらがはたして相続慣習の反映であるか、もしくは重点後置の叙事の法則によるものか、研究の必要がある」(81頁)社会的慣習の反映とみると、文芸としての性質からくるものか、といふべきわざい問題についての積極的とりくみを呼びかけているのである。老大家がこうした新しい問題の提起をするその意欲は、まったく敬服に値する。

くて昔話概念のたて方のちがいを表明したものであるが、昔話それ自体の研究に向かうためには、著者のこうした即物的な觀察がまず必要である。そこから出発しないと、日本昔話を他民族の昔話との比較研究のなかにおくことは困難であろう。

84・85頁に昔話の事件が二段階、三段階に展開するという興味深い立論がある。「二元的対立から事件が解決に向つて展開するときは、三つの経過を経て展開する」と述べ、「笑話の累積と昔話の二元的対立三段階の論理的展開とは本質的に異なる」と述べていて、よく理解できる。ところが

やがて、「多くの昔話は二段階ならびに三段階の形式をとる」となり、形式という概念がそこに入ってきたことに気づく。そして「縦姿女房」の例をあげ、「この対立は帝王対夫婦である。これらは三段階に展開するが、「海幸・山幸」は二元的対立である」と述べ、「二元的対立という構造上の概念が入ってくる。そして次の段落では「二元的形式と三元的形式のいづれが、昔話の構造として本源的なものであるかといふ議論は今もある」として、ブロップやベレンゾーンが二元的形式をもつて完全形とみていることを紹介している。そして

最後には「構造的には二元性がより本源的ではなかろうか」と著者自身の意見を述べている。この部分が難解なのは、昔話のすじの展開の段階と、構造としての二元的対立とをストレートに結びつけて立論していくからではなかろうか。二元的対立が話の展開として二段階の中で示されることはもちろんあるわけだが、理論的には別な概念として扱われないときわめて理解しにくくなると思う。

昔話の主人公には固有名詞がないのが特徴とされているが、著者はその「呼名の命名法にはなんらかの原則があるようである」。(88頁)として、「この方面からの研究はほとんどされていない」と後輩に問題を提起している。新しい問題への著者の意欲は驚くばかり強烈である。

西欧の伝承物語の概念規定にふれては、「なぜ昔話の研究者は西欧の伝承物語とわが国の昔話とがいかに一致し、いかに相違するか検討することをしなかつたのではなかろうか(しなかつたのか、の誤りであろう)。」と從来研究者のあいだで放置されてきた基本的な問題を正しく指摘している。われわれは先達の叱正として聞かなくてはならない。

著者は98頁において、「昔話を(1)奇蹟譚(魔術譚)、(2)宗教譚、(3)現実譚の三類に分ける」と明言している。このことと68頁におけるアルネリトムソンの分類についての記述とを重ねてみると、アルネリトムソンには(D)愚かな悪魔が余計にあるだけで、同じ概念で分けていることがわかる。本格昔話の中をさらにどう分けるかについては著者以外にはまだ発案者はいないと思うが、もし日本の本格昔話もこのように分けられるならば、比較研究上便利である。

第五章伝説の「二 民間信仰伝説」において「産神問答」にふれ(133頁)、「この昔話には重要な問題が伏在しているようである」と述べており、さらに統いて小さ子の問題にふれて、「小人の問題は国際的な研究からみても重要である」と指摘している。またまた後輩への貴重な問題提起として受けとらなくてはならない。著者は小さな昔話の研究は、主人公である小さい男子を奪われてしまいがちだが、その行為、つまり話の中でのきごとを手がかりとして比較の目をひろげていけば、案外比較研究が成り立つのではないかと思つてい

伝説の真実性にふれたところで、「伝説は庶民の科学ではあるが、近代科学以前ではある。昔話を民間芸術といったところがある。美学が要求する芸術価値をもつた文芸ではない。同じく文芸以前であり、昔話は決して文芸科学の対象でもない。」(138・139頁)と述べられている。昔話の文芸性という問題は多くの議論のあるところであり、著者の見解もこの短い文章からだけでは十分に汲み取ることはできないが、この文章から判断する限りでは、評者は見解を異にする。文芸という言葉を、作家による創作文芸に限れば、たしかに昔話はそれ以前であるが、しかし、だからといって文芸科学の対象でないとは考えない。本書ではマックス・リュティの理論はとりあげられていないが、その理由はこのあたりにあるのだろうか。

「グリムなどによつて樹立されたロマン主義的伝説研究、昔話研究は、今世紀三十年代から新たな転換期を迎える、単に民俗学は十九世紀的な文化残存の研究にとどまらず、伝統文化の現在社会における機能が重要な課題として取上げられるにいたつた。」という文章は、その前からのコンテクストとして、日本の口承文芸研究は現代の問題を放置しておいていいのか、という問題

提起と受けとれる。そして評者はこの問題提起にまったく同感である。われわれの昔話研究の最初の仕事は、伝えられている昔話を聞きだすことにある。評者は、伝承文化を捜しだし、忠実に記録して残すことの意義を認めるに、決してやぶさかではない。しかし一方で、庶民の口承文芸の研究をめざしている限りは、この変革の時代の庶民が、伝承文芸とは縁をうくしつつ、一方で何を語り、何を話しあつていているかを追究すべき責任を負つてはいると思うのである。人類はかつて話すことを止めたことはない、というのはクルト・ランケの言葉だが、では現代では何を話しあつて生きているのかが問われなくてはなるまい。この問題意識は西ドイツでは一口話の研究となつて現われ、また、テレビ劇画の分析となつて現われてきていているのである。老大家がこのように新しい問題を指摘されたことに、評者は敬意を表する。

第七章において著者は伝説の伝播について比較する」とあり、(A)主人公、妖怪の掌に入る。から(B)項までがまず挙げられているが、この六項目が何に由来するか明記されていない。これはアーネルトムソンの「タイプインデックス、AT313の記述の一部であることを指摘しておく。そし

近かにいた著者であるから、一般読者が柳田の著者から読みとる以上にその事實を感じたのであろう。しかし昔話研究の現状からすれば、これだけいろいろな話型について諸外国との共通性が明らかになつてしまつた現在では、作業仮説として各話型について諸外国との伝播関係を想定しないわけにはいかない。それはもはや単に「想像説」(162頁)といつてすまされる問題ではない。

この章では165頁から「エタナ昔話」「親棄山」「親棄畜」「天の庭」「海幸・山幸」「失われた槍」「黄泉国・根の國」「三枚の札」について著者の永年の研究の成果のエッセンスを披露している。これらに関連した話型について研究する者にとって貴重なノートである。古今東西の関連ある文献の指摘があり、著者の博覧強記に一驚を喫するものは評者のみではあるまい。

で、全文が実は182頁に出でくる。

アールネリトムソンのタイプインデックスの各番号の全文が訳されることはあまりないので、これらは今後日本の研究者によつて利用されることが多々あると思われるので、明らかに誤植ないし誤訳と思われる点は、敢えて指摘し、修正案を提示する」ととする。

182頁2行めと3行めの間に→AT 313。

4行め、(白鳥に変った)→(田鳥の変身である娘)。5行め、主人公は一羽の白鳥を↓主人公は一羽の鳥を。8行め、箱に↓箱を。10行め、(a)鬼は主人公を↓鬼は主人公に。部屋の中に入れて閉める→部屋の中に入ることを禁じる。11行め、廁を↓厩を。14行め、または紛失した指輪で、その指輪のあう娘を選び出さなければならない↓主人公は紛失した(彼女を殺す過程で、又は生き返りの過程でなくなつた)指輪

牧師、または、↓教会と牧師など、または。17行め、(森、山、川、火など)→(森、山、火)。(d)折りたたみ橋を越えて逃げる→(d)橋を越えて逃げると橋が後ではね上がる。

183頁1、2行め→(4)忘れられたいなずけ。彼女の忠告にもかかわらず、彼の母親

(又は飼犬)とキスすると、または訪問した上で食べ物を食べると、主人公はいいなづけのことを忘れる。3、4行め、覚めのあとに(a)を入れる。または三晩、目をさましてはならない↓けれども三晩めまで夫は目を覚まさない。原典の(b)以下は本書では省略されている。7行め、灰坊(A T314)をあげる。は誤解を招く。灰坊の要素としてここに挙げてあるのは日本の灰坊のものであり、A T314はそれに該当するとはいき、本文は184頁3行めから全文が紹介されているからである。

184頁2行めと3行めの間に→AT 314を入れる。4行め、(c)その時、同意して→とり決めた時間に。5行め、もしそれに背いて部屋に入ると金髪に変わる。↓それに背いて部屋に入つたため金髪にかわる。6行め、ほかの者が虐待するのを看視するようになつつけられる。↓ほかの馬を虐待する

彼の勇敢な行為は、竜退治者として、あるいは呪的賠償をもたらしたものと比較される。↓主人公はその腕前を、戦闘において、又は竜退治者として、又は王に魔法の治療法をもたらす者として示す。最後の行、魔の馬にかけられて魔術は↓魔の馬にかけられていた魔術は。

第八章昔話の帰属に「(二)日本の昔話とウエペケレ」という項を設けて、「両者の相違と一致とを十分に分析研究してみる必要がある」と述べている。まったく同感である。日本昔話とアイヌの人たちのもつ口承説話との構成的、構造的、様式的比較研究は、両者の特性を明らかにするにきわめて

有益な方法と考える。本書で沖縄のことはほとんどふれられていないが（222頁）、最近の沖縄県における口承文芸の調査蒐集活動はめざましく、日本昔話の一環として研究されるだけの十分な資料が集められ、方言で記録され、また共通語化されている。日本における昔話研究は柳田の影響をきわめて強く受けているため、「昔話名彙」に収められた話型のみを採集価値あるものと考へ、資料集の編集にあたつても、「昔話名彙」に該当のないものは削除したという実話も耳にする。「昔話集成」はもちろん話型の範囲を飛躍的にふやしてはいるが、利用者はそこに収められている話型のみを日本の昔話の話型と考えがちである。しかし沖縄や北海道での昔話調査が進んできた今日では、それはもはや許されないことである。本書において沖縄の昔話にほとんどふれていないのは残念であるが、ウエーベレとの比較研究を提倡することによって、目を日本内地以外に向けようとする功績は大きい。

II 昔話分類の諸型式 本書の第二部を成すこの部分では、ファン・ハーン、アールネットムソン、フォン・シイドウ、トムソンの「民間説話」における分類と「モテ

ィーフ索引」、柳田の分類、エーバーハルトの中国昔話の分類、デ・フリースのインドネシア昔話の分類、エーバーハルト・ボラタフのトルコ昔話の分類、神話的伝説の分類、インド動物昔話の分類の紹介をしながら、日本の対応する話型を指摘している。第三部および巻末の比較対照表へとつながっていく。

アールネリトムソンのタイプインデックスにふれて、「(4) 地域的変化の再構成」について述べるなかで、著者は「いかなるタイプを『糖福米福』とするか」を改めて研究しなければならないと説く。『雀の仇討』は独立形か、それとも『猿蟹合戦』から分裂した挿話か」をそれぞれの分析を通じて確認していくべきことを説いている。評者もまったく同感である。従来ともすれば「昔話名彙」と「昔話集成」によって与えられた名称とその内容に頗り切つてしまつて、それぞの話型のサブタイプの考察や、それぞれの話型の相互関係についての考察はなおざりにされがちだったと思う。日本昔話を諸民族の昔話との比較研究の場へもだすならば、そこどころをきつちりしておかなくてはなるまい。

日本の昔話の各話型に AT 番号を付け

ることについて著者は「あるものには AT が付記され、他の話は AT に該当する話があつても何故か放置しているものもある。」と指摘している。

そうした試みを多少したことのある評者の実感から言わせてもらうと、わかつたものから段々に付記していくのが実際に可能な仕方なのである。AT の全話型を頭に入れておいて振り分けるということは不可能なことであり（若死にした西ドイツのフリッツ・ハーコート博士はかなりそれができただが）、わかつた限りのものを付していつて、長年の中に積み重ねて全体に至るのはやむをえないのではなかろうか。そして特に言いたいのは、このような作業は一人で完成できるものではなく、いろいろな人がその都度比較を試みて発表しあつて、検討しながら積み重ねていくという性質の仕事である、ということである。

アールネリトムソンの「昔話の型」（通称 タイプインデックス）の項目が紹介されていて便利である（224頁以下）。多少の誤植があるので読者のために指摘しておく。224頁7行め、その他の動物。↓その他の動物と物。225頁2行め、超自然的要因→超自然的

9行め、一七二〇→一七三四。11行め、(d)夫婦者(一七二五一一八七四)→(d)牧師と教団に関する笑話(一七二五一一八四九)、(e)その他の人間の集団に関する小話(一八五〇一一八七四)。最後の行、非分類の次に(二四〇〇一二四九九)を入れる。

譚にふれ、奇蹟譚という用語を彼がやめたことについて「魔術ないしは奇蹟は決して昔話ごとにとつて本質的なものでもないからである。かつまたこの二つの要素が他の種類の物語にもあらわれるからである」とシドウは用語変更の理由を述べている。と説明している(231頁)。この限りにおいては正しいのだが、魔術や奇蹟が口承文芸の他のジャンルにも現われることがについてのフオン・シードウの戸惑いは、マックス・リュティの理論によつて解決されたとヨーロッパでは考えられていることが伝えられていない。つまりリュティの理論によれば、昔話はその持つているモティーフの種類によつて特徴づけられるのではなくて、あらゆる種類のモティーフを独特の仕方(純化作用、孤立作用)で自己の抽象的文芸様式にふさわしいモティーフにして包含する、というのである。

は最近荒木・石原兩氏の訳により「民間説話」として刊行されたが、関博士は「民話論」として日本の伝承と比較しつつ紹介している(241頁、一七四二年は一九四二年の誤り)。そのなかで242頁10行め、(D)個人の死は、荒木訳の死神の方が適当と考へる。243頁9行め、(C)呪的救済→呪的療法(あるいは治療)を244頁12行め、(6)課題と解決。↓(6)難題と探索の旅。245頁3行め、(8)善惡の關係→善い親族と悪い親族。9行め、(9)權力→神々。246頁11行め、II單一形式の下の(笑話)をとり、次の行との間に(I)笑話と小話、を入れる。それに対応して247頁末のII動物昔話は(2)動物昔話に、III形式譚は(3)形式譚に、IVは(4)にする。

ているが、難解な文で、もう少し説明が欲しいところである。「これらの原素材は昔話の伝承者、語り手が現実の生活についていまだ一度も経験したことのないものばかりである。かえって語り手、伝承者の喜びと気分にまかせて作りあげられた種類のものである。しかしこれらの事物、事件は伝承者が時と所とによって自由に創作したものでなく、古い時代から伝承されたものばかりである。」(231-232頁)。

トムソンのモティーフ索引（モティーフス）を紹介している（248頁）。東洋と西洋の話型を比較することは困難なことが多いので、モティーフのレベルまでおろして比較する必要がある。今後日本の研究者の間でもこれを利用せざるをえなくなると思われるので、まことに適切な配慮である。多少の誤植があるので原典により修正しておく。9行め、(B)神話的呪術的動物。(B)動物。神話的と魔術的は七つの小項目

(E) 死。幽霊の出現および復活。 \downarrow (E)死。幽霊の出現および復活は小項目の名稱。(F)驚異、低級神話、奇蹟 \downarrow (F)驚異。(H)試練または試験と証明、謎 \downarrow (H)試練。他是小項目の名稱。(J)賢明と愚鈍(四項) \downarrow (五項)。(K)偽瞞(十八項) \downarrow (十六項)。(L)幸運の逆転の後に(五項)を加える。(N)幸運と偶然 \downarrow 幸運と宿命。(U)生活の自然 \downarrow 生活の諸相(二項)。(Z)雑に(六項)を加える。

第二章地域別分類では中国、インドネシア、トルコのタイプインデックスを紹介しつつ、日本昔話との比較を試みている。「完全ではあるが将来の研究の捨石にしよう。」(251頁)というこの老貞学の卒直さと心

意気には、後輩の胸を打つものがある。

「わが国の昔話研究者の間では分類はまだ当面の問題ではないようである。自ら採集した昔話を従来の分類形式に従つて配列するのがせいぜいであるが……」と、現在この分野の研究者たちが漠然と感じ始めた弱点を鋭く指摘している。約八千話によつて構成された「昔話集成」から約二十年が経過し、全国でわれわれが持つている話数は五万とも六万とも言われている。そうした状況の中でも、「従来の分類形式に従つて配列する」だけで学問的責任が果たせるかということは、真剣に考えられなくてはならない。上述の如き沖縄と北海道の状況を考慮に入れればなおさらである。これらはさまざまな研究者によつてさまざまに分類の考え方が提示されるべきであるし、

そうしたくり返しの中から、やがて何かが定着してくるというふうに考えるべきであろう。その意味で「名彙」にも「集成」にも多様な意見が出されて当然だと思う。そして関博士自身が本書の中で、「集成」では十分に分析がなされていない(221頁)とか、「わたしも、『日本昔話集成』の中にいくつかの誤りを犯している。そうした誤りを再び犯さないことを望む。」(223・224頁)

（頁）とまつたく卒直に自著を批判しておられるその姿勢は崇高でさえある。今後日本の人承文芸学徒のなかに永く記憶されるべきことであろう。

「完形・派生の歴史的発生の問題」を韓国昔話の研究などの援けを借りて掘り下げるべきことを提唱している(244頁)。まつたく同感である。日本昔話を比較研究の場に出していくときには、あの完形・派生の仮説が再び検討されなくてはならないだろう。

エーバーハルトの「中国昔話の型」が詳しく紹介され、それにに対する日本昔話の対応が列挙されている(255頁以下)。研究者にとって具体的に非常に有益なノートである。大分類としての「笑話」が262頁にあるので、「昔話」も255頁のI動物の前に入れた方が全体の構成がわかりやすいだろう。

256頁6行めで「鳥呑爺」に対して(A T 1655参照)としているが、この番号は「有利な交換」というもので、鳥呑爺にふさわしいかどうか疑問がある。8行め、異類婚姻(三一四〇)は(三一四六)の誤り。この和数字はここではエーバーハルトが与えた話型番号である。257頁9行め、エーバーハルト四五番「蚕」に日本の「蚕神」を当てている。これは正しいと思うが、228頁10

行めと、259頁8行めでは八〇番「牛と蚕」にも日本の「蚕神と馬」の話型を当てていて、巻末の「比較対照表」では四五番と八〇番とを挙げている(33頁)。原典によると八〇番は、「1、蚕が牛をそそのかして地上へ降りてしませる。2、牛は幸せではない。蚕の背中には牛の脚で押された跡がつく。それ以来蚕は約束を破つたなどで、いつも熱湯でやけどさせられる。」という話なので、「蚕神と馬」とよばれる話型とは異なると考へる。257頁11行め、最初の人間(四五一六五)→(四七一六五)。259頁5行め、IV物と人間の成立→VI。

260頁11行めに突然(F F C 128...)と出でてくるが、これはヴォルフラム・エーバーハルト著「中國東南部の昔話」(一九四一年)を指す。巻末の「比較対照表」ではV Mと略すことが、巻末27頁14行めに記されている。同じく15行めの(F F C 25...)はアンティ・アールネ著「エストニアの昔話と伝説」(一九一八年)を指す。巻末の「比較対照表」ではE Sと略すことが巻末27頁に記されている。261頁16行め、XIII呪術→呪術師。17行め、「天福地福」にあつたA T 847Aは存在せず、847*は無関係の話なもので、おそらくA T 834の誤りであろうと思

われる。262頁1行め、二九一、法螺吹→一
九一の誤植。

エーバーハルトIIボラタフの「トルコ昔
話の話型」も紹介されている(268頁以下)。

各話型について日本、パンチャントラ、
ソップ、グリムなど可能な限りの比較を
試みており、たいへん参考になるノートで
ある。三五番、木靴に関連して、日本の雁
取爺などは親切不親切の対立型として語ら
れる傾向がつよいが、雁取爺などの犬、臼
など富を与える形式が多いことを指摘し
て、中国の類似話型を中間にいて比較す
ると結びつく、と示唆を与えてくれてい
る。日本で「隣の爺型」とよばれているも
のをこのようない観角から比較し、分析する
ことは重要であろう。日本のばあいには、「
隣の……」という設定にあまりに興味が
傾きすぎていると評者は考えている。273頁
で9行めに「アモールとサイキ型」とあ
り、14行めに、「アモールとブショケ」と
あるが、サイキという英語読みを生かせば
ふつうは「キュー・ピットとサイキ」とい
い、ドイツ人は「アモールとブショケ」(又
はブショビエ)といっている。いずれにせ
よ同一話型である。念のため。

さて本書においてもっとも重要なと思われ
るIII日本IIアジア地域の昔話の平行関係に
到達したが、予定の紙数をはるかに越えて
しまっている。しかしここを抜くことはで
きないので検討をつづけさせていただく。
上述の如く、日本昔話全体をこのように
広範囲に比較することは一個人の、一回の
仕事で完成できるものではない。それは著
者が「これらは、将来比較研究の過程で、當
然に補充されるべきものである。ここでは予
備調査の予定稿として付加しておく。」と述
べているとおりである。大先達がここまで
の広範囲な比較の試みを大胆におこなつて
くれたからには、これを個々の話型の細部
にわたって深めていくのは、われわれ後輩
に課せられた課題であろう。「大胆に」と
いうのは少ない資料であえてこうした比較
を試みたことをさす。すなわち、ここで比
較の対象としてとりあげられたアジア地域
の資料は、原資料そのもの(又はそれの日本
語その他の共通語訳)はむしろ少なくて、ビ
ルマ一点、タイ二点、カンボジア一点、ヴ
エトナム二点、インドネシア二点、モンゴ
ル二点、中国一点、ミヤオ族一点、朝鮮六
点、その他にグリム昔話集、搜神記、パン
チャントラ、ソップである。そして話
型目録が重要な比較対象とされている。そ

れは、エーバーハルトの中国、エーバーハ
ルトIIボラタフのトルコ、ヤーヴィンのユダ
ヤ・オリエント、トムソンIIロバーツのイ
ンド、ベドカーのインド動物譚、デ・フリ
ースのインドネシア、アールネのエストニ
ア、そしてアールネ・トムソンのタイパイ
ンデックスである。

資料集はその地域の全話型を包含してい
るわけではないし、ある話型の代表的なも
のをもつてているとも限らない。話型目録は
全話型の鳥瞰はできても、各話型のサブタ
イプや細部を知ることはできない。従つて
右の資料及び目録で比較を試みるのは無謀
だという批判もありうるかと思うが、評者
はこの試みをためらわずに支持する。先頭
に立つて歩く者は、このくらいの大胆さで
大ざっぱな把握を平気でやらなくてはジャ
ングルに道をつけることはできない。われ
われ後から歩む者には、足で草を踏みつけ
ただけの小径を、いかにしてよい路にして
いくかという課題がつきつけられている。
さて本文を読むと、第三部を正確に読み
ることは相當にむずかしいと思つた。そ
のむずかしさの由來をさぐりあって、読者
の理解を助けることも評者に課せられた一
つの役割りと考えた次第である。

各節の頭に横書きされているアラビア数字は A T 番号である。従つてその次に来る話型名も A T のやうなのがと思うが必ずしもそうではないことを知らねばならない。「1 魚泥棒」「2 尻尾の釣」は A T と同じ。「3 狐の仮病」は A T では「ほせの血と脳味噌」「4 仮病の企や」は A T では「仮病のトリックスターを運ば」。「6 逃亡の手段として風向をたずねる」は A T では「相手を捕まえた動物がだまされでしゃぐる」という具合である。それは読者にわかりやすくするための工夫と思われるが、A T と異なることがあることを知つておかないと、引用などのときに混乱が生じるだらう。

A T には各話型の内容が短くまとめられて記述されているが、この部分も本書にそのまま紹介されているばかりで、そうでないばかりがある。12 の記述は同一だが、3 では A T の末尾にある「熊をおどかす」が欠けている。6 では A T の文を非常に補つて書いてある、という具合である。これも 130 などで明らかにわかるように、読者にわかりやすくするために言葉を費しているのだが、A T 番号の下にはあるが A T の文ではないことを指摘しておくる。このような記述の異同を第三部全体にわたつて確認

することは時間的に許されないので、試みに最初の七頁についてみると(30 頁まぢ)、A T と同名同文としてほぼ引用に耐えるもののは、1, 2, 41, 43, 57, 60, 76, 91, 121 である。この割合でいへん、全体として A T の数はかなり少ないものと予想される。

話型の記述文が正確に引用されているかどうかを気にするのは二次的引用の可能性のためばかりでなく、ここに引用された部分についてははたしかに日本に対応があるが、引用されていない部分には対応する部分がないというばあいに、それを対応する話型とよんでいいかという問題が生ずるからである。それは話型とモティーフの対応、あるいはモティーフとモティーフの対応であるかもしれない。日本昔話を諸外国の昔話と比較するばあい、話型として対応するのか、モティーフが対応するのかの区別ができる限り明確にする必要があると評者は考えている。

A T 番号は横書きのアラビア数字で示されているが、この数字にいろいろな符号がつけられていることがある。これは著者任意の分類符号であることが多い。A T オリジナルの符号は例えば、A T 275A または B, A*, B*, または A T 275*, 275** であ

る。296 頁の 9 の項に cf. 9(a), 9(b)...9(e) があるがこれは著者による特典。160 の項には A T と同名同文としてほぼ引用に耐えるものは、cf. 160(a), 160(b)...160(d) も著者による符号。221 も同じ。275 の (A)(B) の全項目と、308 頁の (A)...(D) も同じ。275 の話型名と記述文はなぜか A T とは別物。おそらく次の(A)以下を入れるために一般的な書き方にしたのだろう。A T 275 は「狐とぞりがの競走。後者が狐の尾にぶらがつて勝つ」である。評者の理解では A T の番号は話型を言つてゐるのだから、306 頁の 275 に付せられた著者の文のように一般化してしまふと、話型群を言うことになつてしまふのではないかと思う。

第二章昔話になると、A T の話型記述が長くなるため、本書の文章はほとんど要約になつていて。それはやむを得ないとしても、話型名は番号と共にそのまま紹介した方が日本の読者には親切だと思うがどうだらう。例ええば A T 301 は甲賀三郎と書いてあるが、原典では「11人の略奪された王女たち」となつていて。325 魔術師と弟子……、「文福茶釜」……という書き方が A T の記述と著者の記述をもつとも明確に区別して伝えていると思う。英語の原典なしで本書を読む読者の方が圧倒的に多いだらうこ

とを考えると、そのような配慮が欲しいと思う。この項は、魔法と魔法使いのほとんどの日本昔話の中で、狸がその役割をなつていて話型としても近いという注目すべき点を指摘している。今後比較研究によつて成果の期待できる分野である。

「433A 蛇の王子 普通 A B 115 の直列に分けられる。」319頁の記述が

亞型に分けられるよう感じられるが、原典では433が「蛇の王子」で、それが433A, 433B, 433C へと別型の分類される。

(B) 少年、運命を求めて旅行……とあるが、

一九六一年版のセカンドプリンティング（一九六四年）では460という独立の項はなく、「460 A 報いを求めて神のもとへ旅する。神は貧者に与えた施しの報いをくれる」と聞いて、若者が神のもとへ向けて旅に出

て、報いを受け、旅の途中で頼まれた神への質問の答えも受ける。」[460B] 幸運の女神を求めて旅する。貧乏人に運がない。彼は幸運の女神に会うべく遠く旅して行き、旅の途中で尋ねられた質問の答を女神から

もらう、そして自分の不幸は自分が運のない日に生まれたからであると聞かされる。

の品物を盗む 主人

のちに結婚して金持ちになるが、やがてすべてを失なう。」かなり違いが見受けられるが版によるものだろうか。文献目録によると（199頁　巻末26頁）一九六一年版の FCC と 184 だから同じもののはずだが、480 の(1)(2)……(6)は著者が対応する日本語二つとも書かれている。

の品物を盗む　主人公は夢によって財産を強引に取りもどす。」
613はA.Tの長い記述文を要約して書かれていたが、「一人のうちの一方が相手に目をくり抜かれ、盲目になつた男が木の下で超自然者の会話から秘密を聞き取つて視力恢复する」という要素は不可欠なものと思う。

513A 六人仲間世界旅行。この記述文は著者が内容理解のために補つて書いたもの。著者は「桃太郎」をこのタイプの童話化としている。柳田の研究以来、桃太郎についてはその誕生にばかり検討の目が向けられてきたが、評者は、「全体としてみると、『ちから太郎』の変形である」ときは、『ちから太郎』の変形である」と

1149子供、鬼の肉を欲しがる。原文ではこのあとに、「男は鬼に、子供たちが鬼の肉を食べているのだと思いこませる。鬼はこわがつて逃げる。」という記述がある。すると著者がここに「天道金の鎖」と「古屋の漏」をあてているのは無理ではなからうか。

する著者の見解に賛成する。山陰地方など
で発見されている ものぐさで大力の男と
しての桃太郎話などを手がかりとすれば、
この角度からの解説も可能であろうと考へ
ている。

1161の文は要約にしてもかなり異なるが長いので指摘にとどめる。1245記述文の後半が略されている。従つて話型全体としては「握り屁の命」が対応する可能性はうすくなろう。1260原文は、「氷の穴に入れた

563, 564 も話題名記述文が原典と異なる例である。563 は説明的にかえられたと思われるが、564 の原文は、「魔法的に供給してくれる財布と、『出てこい、おいでから出てこ!』金持ちの隣人がその魔法

かゆ。ミールを氷穴に入れ、あとで一人ずつ食べにとびこむ。」1313C 死んだ男たちに語る→死んだ男が大声でしゃべる。原典の記述文からみると「草葉の陰」をあてるとしても「参照」付ではなかろうか。比較

対照表ではさきの記述文は原文とは異なる。1319駄鳥の卵→ろばの卵。1360 C ヒルボーハント爺の記述文は原文とは異なる。1373 A と cf. A T 449があるが、A T 1407 の誤りであろう。1383 と 1384 に騒乱がみられる。原文をみる、「1383 女セタールと羽根が体じゅうについたため、又は着物がずたずたに切れているため自分自身を見分けられない。犬が彼女を見わけられない。」「1384夫が女房と同じくぬい愚かな人間を三人搜しにでかけた。」1415 幸福なハンスの本書の文は A T 1655 有利な交換にはば該当する。1415 の原文は、「愚かな取引。彼は馬を売って牛を買ひ、牛を豚と交換し、豚を鳶鳥と交換し、しまいに手許に何もなくなる。妻がおこらないので賭けに勝つ。」1450 賢いエリゼ (エルジーがよからん) の原文は、「少女が地下室にビールをとりに行かされ、そこで、初めて子供が生まれたらなんという名をつけようかと考えこむ。父も母も同じように考えこむ。求婚者は立ち去る。」1458 少しあしか食べなかつた少女の原文は、「少女が少ししか食べせず、母親は「もこうだと言つ。翌日求婚者が見ると少女がパンを焼いている。そして娘が食べられることがわかる。」1565 原題名はかかない約束。1586 原文は

要約でわかりにくいが、「法廷ではえを殺したらいいと言われた男。裁判官が心、どうでもいいからはえを見たら殺せと言わされた。男は裁判官の鼻にとまつたはえを殺す。」1642 原文の I、II、IIIまでを (1)(2)(3) として挙げているが、IV、V が省略され、いふたま、全体はわからない。1653 木の上の戸は本書の記述文を生かせば、むしろ 1653 A に近い。1653 C 道標一石田。1725 原文によると、「トランクに入つた愚かな牧師。利口なならず者がトランクを水に投げ込む用意をする。」1775 は原文によると、「狩の途上、百姓家に泊まる。夜なかに牧師は空腹をいやすためにおかゆを捲しだす。」(寺男が牧師を案内するために、牧師にロープの端を渡してくれてあつた)著者はこれに、理解のために補足しているわけだが、比較研究のための基本書としては、どこがオリジナルの文の訳で、どこが著者による文か、一目瞭然という形にしておいた方がよいだらう。

個々の問題については検討の余地ありと思われることもある。例えば、A T 番号のあとにいきなり「昔話集成」または日本の話型名が来るが、A T の番号のみならず、その話型名も示しておいたら、原典を持たない読者は便利だつたろうと思われる。A T 610 は「奈良梨取り」をあてていて、が、これは 610 の前半部にのみ対応しているので「参考」をつけた方がいいだらう。A T 1149 は参照として「古屋の漏り」をあてていて、が、1149 が上述の如き内容であるから、これは無理ではなかろうか。同じように、対応をやめるいふべのためらいが、A T 1245, A T 1415, A T 1450 は感じられるが、前者が上述の如き内容であるから、

昔話比較对照表 卷末の 28 頁から 49 頁までにわたつてこの壮大な対照表がこまかい活字で印刷されている。評者はかつて閲博士にこの表の手書き原稿を見せていただきたいことがある。そのとき受けた大きな衝撃

これは無理ではないか。A T1655に「雁取爺」をあてているが、前者が上述の内容であつてみれば、「雁取爺」とは別物ではないか、等々。しかし著者が永年にわたつて比較検討してきた成果を、今評者が短い書評で喋々することは不謹慎のそりを免れないと思うので、これはゆつり時間を持てて検討させていただくことにしたい。

以上、誤植、誤訳の指摘をふくめていろいろな批判を述べたが、すでにくり返し述べたように、それは本書の価値をいささか減ずるものではないと思う。ジャンル的には人間の踏み路を作るには、これくらいの

め。 In die alter zeit→In den alten Zeiten.
14 行め、 H→H→H→H→H→H→H→H→
クの。 93 頁 8 行め、 言話も彷彿する→言話
を彷彿させる。 98 頁 11 行め、 人間であるが
→人間であるが。 17 行め、 1種類の主人公
には→1種類の主人公は。 99 頁 2 行め、
merveilleux→merveilleux. 114 頁 12 行め、 伝
説→ストーリー説→ストーリー。 115 頁 6 → 7 行め、
Tierm-äischen→Tiersmärchen→Tiere
→。 131 頁 7 行め、 Volksmärchen→Volks-
märchen. 135 頁 11 行め、 紹介されてたが→
紹介されたが。 150 頁 11 行め、 投影をとみる
にもうとやかわしい→投影とみるにもうと

こまかい誤りをおそれていてはできない。今日、日本の昔話研究にとって大切なことは、とにかく踏み路を作ることなのである。その意味で評者は本書を高く評価したい。誤植などを指摘したのは、本書を、日本の研究者の共有財産としてより完全なものにしたいと願つてのことである。

66頁 2行目、 contes populaires→conte populaire. 13行目、 Mundlich→mundlich.
68頁 2行目、 伽葉だん→伽葉だん。 33行目
の、 Märchenhaft→märchenhaft. 15行目、
Novellenartige→Novellenartige. 76頁 4
行目、 (Etheorie) →(Erbtheorie).
(Indogermanische ...) →(Indogermanische)

あるが、16行め、知的解答の如き。
→ルンバ。15頁最終行 Ätiologisches sage
→Ätiologische Sage。15頁1行め、瓜子姫
は殺れども→殺れねども。15頁7行め
transformation→Transformation。15頁5
行め、Entlehnungs Wanderungstheorie→
Entlehnungs- または Wanderungstheorie.

付 その他の誤植の訂正
4 頁11行め、及んで \rightarrow \rightarrow 6 頁
 \rightarrow ね、Vierteljahrsschrift f. Literatur-
wissens... \rightarrow Vierteljahrsschrift f. Litera-
turwissens... 15 頁 4 行め folkloristisch
→folkloristische.
17 頁 33... 4 行め Rint-

...). 77 頁 10 行迄、(Epischesgesetz) →
(Episches Gesetz). 11 行迄、Selbstsbe-
richtigung→Selbstberichtigung. 80 頁 12 行迄
め、附加^{アタフ}ナレル→附加^{アタフ}ナレル。86 頁
6 行迄、これも援助動物→それを援助動
物。90 頁 8 行迄、Heute→heute. 91 頁 6 行迄

165 頁 9 行め、トランショナルペーパー→トランショナルペーパー。
171 頁 最終行、砂綱…〔H
1021〕→〔H1021.1〕。173 頁 3 行め、娘をひどく
扱う→娘をひどく扱う。194 頁 (35 ル) Ber-
rendsohn→Berendsohn. 197 頁 (81 ル) Va-
rantenverzeichnis … Bedeutungen→Va-

gerenzählungen->Ringenerzählungen.

→ In die alter zeit→In den alten Zeiten.

riantenvorzeichnis ... Deutungen. 198 頁

(35) unterschohe en Braut->unterschoben
nen Braut. 200 頁 (35) finn ländischen
->finnländischen. 200 頁 (27) Schleswig-Holsteinische->Schleswig-Holsteinische.

(31) Jeypreland->Jeyporland. 209 頁 2 行め、 民学地図->民俗地図。 12 行め、 分布するのとある。 → 分布するのとある。 15 行め、 いかに分けてるかが → いかに分けるかが。 211 頁 7 行め、 研究するトあは→研究をするトあは。 213 頁 8 行め、 トあは→研究するトあは。 216 頁 5 行め、 ⑨祈願型であるが→あるか。 A->Aarne. → AaTh. 一九頁参照とあはが 1 九頁に該当なし。 217 頁 5 行め、 (MI) やテ 1-イフ・インデックスの頭文字をひれば MI となるが、 モティーフ・インデックス の番号を示すトあは Mt. Mot. トするのが普通である。 従うト 217 頁 3 行め、 MI (U136) な (Mot. U136) と書くのが通常である。 223 頁 9 行め、 (A T1180+H1023.

2) → (A T1180 [H1023. 2])。 なせなん A T1180 は「物語水を入れる」と [H 1023. 2] であら、 H1023. 2 は「課題一物語水を入れる」であつてはしない。 だから十、 ふふふ、 トは同じめ、 分類して物語と→分類した物語と。

19 頁 8 行め、「娘・王子と結婚」→「娘が又は「娘」。 236 頁 3 行め、 Uriah Letter. 20 行め、 ハーブ・ウバ、 ハーブの動詞が見当たらない。 16 行め、 Kettenmärchen->Kettensmärchen. 最終行、「ハーブ」→「ハーブ」。

242 頁 8 行め、 A T 367->A T 307. 247 頁 (D)→(P). 248 頁 7 行め、 もの範囲は、 →範囲は。 249 頁 4 行め、 『ペシタメローネ』→『ベンタメローネ』。 251 頁 9 行め、 ア・シリ→ア・シリア。 253 頁 4 行め、 ふるのと少数→ふるのが少數。 254 頁 13 行め、 Folk-Narrative->Folk-Narrative. 269 頁 8 行め、 Völkergedanken →Völkergedanken. 289 頁 6 行め、 Hand-mörterdurch→Handwörterbuch. 12 行め、 chinesischer->chinesischer. 299 頁 15 行め、 49 A 飲む蟹蟹→49 飲む蜂蜜。 300 頁 14 行め、

田舎の鼠・町の鼠を招待→田舎の鼠が田舎の鼠・町の鼠を訪問。 301 頁 5 行め、 鎌治屋の姿の→鎌治屋の姿の。 302 頁 5 行め、 田付の田付→田付を見い、 322 頁 16 行め、 Schicksalsfrauen->Schicksalsfrauen. 326 頁 2 行め、 Gireverus->Greverus. 327 頁 3 行め、 Rooth, A. G.->Rooth, A. B. 332 頁 4 行め、 Zauberdung->Zauberding. 6 行め、 尽きぬ錢婚→尽きぬ錢縫 (257・258 頁など) は尽きぬ財布としている。 その方がよからう。 371 頁 16 行め、 X 1269. 1→X 1267. 1. 卷末 27 頁 12 行め、 EB Eberhard->EB Eberhard. 下ふるのみ、 GM. ハリヤはグリム昔話集のことを GM と略していが、 KHM とふう略号が世界的に定着しているのや、 その方が望ましいと思ふ。

(おまけ おしお・日本女子大)

『日本民謡大観』九州篇（北部） 友久 武文

わたくしは、昭和三十四年の夏に『日本民謡大観』「中国篇」のための採集調査が行われた時、無理におしかけた恰好で、何日間が見学させていたいたいことがある。この時は、中国地方の田植唄が採集の最大目的であったから、一度とありえない貴重な経験であった。なにせ町田佳声氏をリーダーとし、その一行には牛尾三千夫氏も加わっておられたのである。中国山脈を南か

に現場での採集を経験することができた。この時は、中国地方の田植唄が採集の最大目的であったから、一度とありえない貴重な経験であった。なにせ町田佳声氏をリーダーとし、その一行には牛尾三千夫氏も加わっておられたのである。中国山脈を南か